

# 大子の歴史散歩

## 第四回

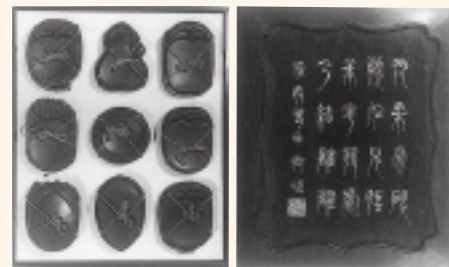
### 小久慈硯すずり

(その二)

その全文を記してみよう。

九果為硯	頗似兒嬉
筆華發處	乃結離離
保亥春日	齊昭印

九種類のくだもの形をまねて硯を彫つてみたその形は子どものような顔に似ている。墨を磨つて筆に含ませ字を書こう。そのためには硯墨、筆、紙がひとつに結びつかなければならぬ。



▲ 九果硯 (茨城県立歴史館所蔵)

天保年間(一八三〇年)になると九代藩主斉昭公(なりあきこう・烈公)は、この石に非常な関心を示した。そして、藩校(はんこう・江戸時代諸藩が設けた学校)弘道館の創設(一八四一年)にあたっては、その基本理念とするところの弘道館記の碑石に採用することを決定し、郡奉行に採掘を命じている。烈公が館記に小久慈石を選んだのは、義公によって認められ文房四宝の一つになった石が領内から産出していたのであるから、この石を使用したのは当然である。

しかし、実際に掘り出してみると疵(きず)やヒビ、紋様等が出て硯石にするような良質の大理石が見つからず、止むなく真弓山の寒水石に変更する有様であった。ところが幸いなことには、この時採掘した石の一部が烈公の指導の下で硯に刻されていたのである。

現在、茨城県立歴史館の所蔵となっている九果硯である。小振りな九面の硯が一面づつ果物の形に見立てて刻されて一つの箱に納められている。そして、その箱の表には金泥で、烈公が得意とする垂露篆(すいろうてん・筆法のひとつで、縦に引く画の終わりをはらわずに筆を押さえて止めること)でこの硯を賞している。

そして、加藤寛斎の「常陸国北郡里程間数之記」によれば、烈公によってこの硯石が国にとつて吉兆であることから、小久慈の音訓をとつて「国寿」と命名し、その硯を「国寿硯」と称させたという。万延元年三月、安政の大獄(あんせいのおたごく・大老井伊直弼が勅許を得ないで仮条約に調印し、また、家茂を將軍に迎えたこ

大子町教育委員会社会教育課 主幹 吉成 英文

とに反対した人を罰し、多数の志士を処刑した事件)を指導した大老、井伊直弼は桜田門外で水戸浪士らによって暗殺された。

その時の指導者の一人、関鉄之介(せきてつ)のすけ)は事件後、幕吏の追求を逃れて各地を転々としていた。

そして、ほどばりの冷めたころ、北郡郡方へ勤務していた頃から交際のあった袋田村(現 大子町大字袋田)の桜岡家にはしばらくの間潜んでいた。

逃亡中ということ、行動を制約されていたからであろうか、桜岡家にはこの潜居中に刻したという大きな小久慈硯が残されている。また、箒(ほうき)の柄を折って作ったという横笛も保存されている。



▲ 硯 小久慈氏所蔵 刻自 小久慈氏所蔵 之 関鉄之介 (大字袋田)

今も大子地方には、鉄之介の遺墨が数多く残されているが、彼が自分で刻した硯で墨を磨り、興に乗じて和歌を詠み、揮毫(きごう)したり、あるいは横笛を奏しんだりしていたとすれば、時の大老

を暗殺した天下の大罪人の潜居生活としては、何とも大胆不敵な、そして、のどかなものであったものである。

明治時代になると御留山の一部は民有林として払い下げられたが、大部分は国有林に編入された。明治二十一年には大子地方の有志数名が本格的な採掘を計画し、小屋掛けまでして試掘を試みて結果、採算がとれないということで立ち消えになってしまった。

しかし、それ以降も好事家の間では細々とではあるが、石を拾ってきては自刻して愛用するといった、いわゆる「文人硯」の伝統は守られてきた。ところが、この硯石に非常な関心をもった一人の実業家がいた。

栃木県茂木町出身で水戸市に来て煙草仲買商等の商売を手広く営んでいた雨人杉田恭助である。彼はこの硯石を何とか世間に周知させようとして奔走した。

そしてその結果は、昭和四年陸軍特別大演習時の昭和天皇の茨城県行幸に際しての茨城県知事(牛島省三)からの献上品として実を結んだのである。

内容に関するご意見やご感想及び問い合わせは、社会教育課社会教育係歴史資料室 電話(2)2627までお願いします。